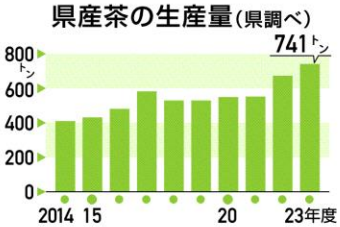
大分合同新聞
ワークシート

年　　組　　氏名

大分合同新聞 2024年9月24(火) 朝刊 ２１面



おおいた 食と農林水産

県産茶の生産量増加

ペットボトル飲料 消費伸び

23年度741トン

県産茶の生産量が増えている。2023年度は乾燥させた荒茶が741トンで、14年度に比べて331トン（約8割）増えた。生活様式の変化により、急須に入れて飲む茶葉（リーフ）の需要が減ったものの、手軽なペットボトル飲料の消費が伸びているためだ。

県、臼杵、杵築両市と飲料メーカー伊藤園（東京都）は06年、茶飲料向けの産地づくりで協定を結んだ。その後、宇佐市や4生産法人が加わり、産地化が進んだ。

県内の栽培面積は06年のスタートから23年度には202㌶に広がり、茶全体の42・2%を占めるようになった。単価は安いものの、リーフより一度に摘み取れる量が多いため、収量が増えている。栽培技術も安定した。

臼杵市野津町西畑の豊後大分有機茶生産組合（永田恭士社長）は06年から生産を開始し、現在の規模は40㌶。昨年は約120トンを出荷した。今年は春先に霜の被害が少なかったことから、1割程度の増加を見込む。

ほとんどを飲料メーカーが買い上げるものの、品質により価格に差が付く。後藤源宗（もとひろ）取締役栽培部長（38）は「天気との勝負であり、一定の品質を保ちつつ生産量を増やすのは手間が必要」と話す。

県園芸振興課は「茶飲料用は目標だった200㌶を上回った。リーフ茶も高品質なものや、紅茶・ウーロン茶などの新たな需要に対応したい」と話している。

（清松俊朗）

茶葉を収穫する豊後大分有機茶生産組合の従業員＝7月、臼杵市野津町

メモ　総務省の家計調査によると、昨年の１世帯当たりの緑茶・茶飲料の年間支出額は１万1504円で、ここ数年は横ばいが続く。2007年から茶飲料がリーフ茶を上回っており、昨年は8290円だった。

〔問①〕県産茶の生産量が増えています。なぜですか。

〔問②〕飲料メーカーが茶飲料向けの協定を結んで産地化しています。県内の栽培面積は2023年度にはどのくらいになりましたか。

〔問③〕茶生産量をさらに増加するための方法を考えよう。

©大分合同新聞社　教育目的以外の無断転載・複製および頒布は禁止します。